

2017年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

ほしきものなど無けれども宝船  
大地に日あふれ建国記念の日  
二の替声の華やぐ大向う  
日に透ける蕊の先まで梅日和  
言葉にはならぬ思ひも寒見舞

藤沢 藤田 富子

散るもみち鮮やかなるを葉にと  
住む人の無き庭落葉散り敷けり  
冬霞スカイツリーをつつみをり  
足繁く通ふ小春の小買物  
酔客の背なおでん屋ののれん越し

町田 小森 まさひこ

山肌の雲影もしや雪女  
展望の下に凍てつく湖と森  
オリオンに月重なればさらに凍し  
梅の木に流れに春の兆しあり  
なごり雪二十二歳の時をふと

2017年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

食べたくもあり食べたくもなき田螺  
ひとつ去り春の愁のまたひとつ  
惜しみつつなほ大胆に剪定す  
泡を吹く穴への期待汐干狩  
パラボラに宇宙の風の光るかな

藤沢 藤田 富子

落の臺土手に花芽をのぞかせて  
二月礼者の曾孫生まれをよろこびぬ  
まんさくの光古刹の道を占む  
三寒に気のゆるされぬ昨日今日  
鳶の笛冬の波間に低くあり

八王子 石井 蓉子

水仙が春すぐそこと告げており  
青空に白梅紅梅咲初むる  
夕暮れやなんと日脚の伸びたこと  
一人居に雛菓子切なくも甘し  
ランドセルの真新しきが通り過ぐ

町田 小森 まさひこ

荒天に集ひし忌日のあたたかし  
放置さる広き空き地に鳴くびばり  
種蒔くや点となりたるトラクター  
横山の色の移ろひ春開ける  
老鶯の鳴き継ぐ道をたどりゆく

2017年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
ひとひらの揺れてひとひら散るポピー  
まっすぐに泳ぎにくさうなる金魚  
けだるき香立て山梔子の花の錆  
絞り出す気力を焼きつくす暑さ  
ビル群は首都の幻想夏霞

藤沢 藤田 富子  
行楽の戻り渋滞花曇り  
古民家の藁屋根ゆらり陽炎へる  
沈丁の香りほのかにひろごれる  
初花の下に寄り添ふ道祖神  
のどけしや嬰兒は母に知恵増せり

八王子 石井 蓉子  
春の雨静かな静かな日曜日  
三年の日々を思へば桜咲く  
一人居の家事進みゆく春の朝  
さえずりの部屋に飛び込む朝かな  
山なみを近くに見せて光る風

町田 小森 まさひこ  
翡翠の色を残して飛びゆけり  
改めて思ふ憲法記念の日  
メーデーや年俸契約すませけり  
卯波打つ太平洋を刺す岬に  
俳聖の乗船の地の出水かな

2017年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子  
避暑暮し鳥も獣もみな仲間  
一枚の日除けに狭くする世間  
漂へる心に揺るる星月夜  
連発の闇に厚みを生む花火  
胸に住む人の声聞く星月夜

藤沢 藤田 富子  
友逝きて更地に残る濃紫陽花  
苔むせる一番札所著我の花  
春暁の夢に語れる夫のみて  
軽鳧の子のお尻ふりふり笑み誘ふ  
(軽鳧／かる:かるがも)  
鮮やかに光を放つ苔の花

八王子 石井 蓉子  
一人占めせし公園の緑かな  
夏の夕公園に子のいつまでも  
一人居や夜更ししたき夏至の夜  
日の匂ひ取り込む夏の屋下がり  
悲しみは捨て去るものや薔薇真っ赤

町田 小森 まさひこ  
蝦夷菊の蝦夷の短き夏を咲く  
夏至といふ日の追われたる蝦夷の農  
月見草萎みし時の帰宅かな  
国境の海の上なる星月夜  
峠道これより下り天の川

2017年9～10月掲載分

2017年11～12月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

颱風に玻璃一枚を隔つのみ  
不器用に日々をこなして爽やかに  
月光やこの世のことはなべて些事  
偶然といふ爽やかな出会ひかな  
すぐそこにありて遥けき虫の闇

藤沢 藤田 富子

怠けぐせ暑さのせいにしておりぬ  
何をする気にもなれずに夕端居  
稲妻の玻璃光らせてくる恐怖  
暁の夢か境か汗しどど  
年を経し今も記憶の敗戦忌

八王子 石井 蓉子

朝刊に処暑と書かれていて猛暑  
蜩のひと日一日に違いあり  
暑き日や今日は長崎原爆忌  
通勤の歩幅に合わせ蝉の声  
さあ仕事入道雲がわらってる

町田 小森 まさひこ

天高しシフブレ俳句七十回  
一村が秋の実りに沈みたる  
新米ののぼりに足が向かひたる  
高原の早し日暮れに松虫草  
数珠玉や下校児童は固まりて